第１回天神山アートスタジオ在り方検討会 議事概要

１　日時

令和８年５月２５日（月）　１４時００分から１６時００分まで

２　出席委員（敬称略）

・佐々木　亨（北海道大学名誉教授）
・樋泉　綾子（公財）札幌市芸術文化財団）
・小田井　真美（さっぽろ天神山アートスタジオ　AIRディレクター）
・髙橋　宣男（まちづくり会いきいき南平岸　代表）
・成澤　元宏（市民文化局文化部長）

※欠席・濱谷　雅弘（元北海道科学大学教授）

３　議題

天神山アートスタジオの在り方について

４　議事

⑴　開会

事務局より開会が宣言された。その後、各委員による自己紹介が行われた。

⑵　委員長・副委員長の選出

開催要綱に基づき委員の互選が行われ、委員長に佐々木委員、副委員長に樋泉委員がそれぞれ選出された。

⑶　事務局から説明

事務局より、天神山アートスタジオの沿革、管理運営状況、及び札幌市の財政状況について説明があった。

■会議の公開・非公開について

・議事録が内部の検討で使われる資料以外に一般に公開される予定がないことについて確認。

⑷　施設の在り方について（テーマ別整理）

■財政上の課題・施設の維持について

・大きなトラブルはないが、頻繁にどこかが故障するなど、インフラの寿命を実感している。アーティストの滞在施設として、これから予算が少なくなっていく中で、札幌市内の文化芸術施設ごとに役割を分担させるということは必要だが、AIR機能を完全になくすのではなく、分散・縮小による維持を検討してほしい。例えば、トイレや休憩所の機能は残し、訪れた市民が自然とアートにアクセスする仕組みは残した方がいいと思う。AIR拠点としてはバス・トイレ・キッチンは共用で十分。

・解体・改修を判断する際は、建物の文化財的価値などの建築上の位置づけも検討要素の一つ。もし建築上の重大な意味がないのなら、解体のハードルはすごく低くなると感じている。
・ほかに修繕しなければいけない市有施設がたくさんある中で、どれを優先的に行うかという判断になっていくのだろうと思う。この施設の管理状態は非常に良いように見受けられるので、長く使う方向で検討すべき。解体して新築するのは現実的ではない。
・市の財政が厳しいというのはよく分かるため、民間の力を活用しつつ、コストを削減した施設運営を続けていく方法も考えてみてはどうかと思う。壊すのはもったいないと感じる一方で、建物はインフラからまず悪くなるというのもよく分かる。
・札幌市の財政調整基金（収支が合わないときのための基金）が近い将来に枯渇するという試算も出ていて、令和８年度の予算要求、あるいは来年度の予算要求もかなり厳しいものになっている。そのような中でも、文化事業は大事だと思っているので、お金のかけ方には工夫が必要。天神山ASで実施してきた事業については、今後はソフト事業を充実させた上で、施設については別の資源を使ったほうがいいのではないかと考えている。民間の力の活用については、民間企業等が修繕費を負担してくれるかというと、これまでの施設の利用状況から営利面も考えると難しいと思う。
事業の残し方として、施設ではなく、市の計画にしっかりと位置づけるという方法でもできる。

■地域貢献・利用者への影響
・公園管理課と連携し他分野連携ができている。意図せず市民のための新しい居場所を作ることができたという点は大きく、施設の存在は夜間の安心感を提供している。来館する市民へのケアが起こっている。また、来館する市民はアートを目的としていないが、偶発的にアーティスト・アートに出会うこととなり、札幌市における新しい市民とアートの出会いの場になっている。市民がアートに触れる機会が文化施設あるいは事業に求められているが、箱があることで、イベントという「点」ではなくて、「面」としてそれを実現している。
・この施設は「地区センター」的役割も果たしていると感じている。市民全体が享受するのは大事だが、地区に特化して地域住民から愛されているものを市全体に広げる必要が本当にあるのか。文化だけではなく、健康やリラクゼーションなど、様々なものが付帯していることこそが天神山の価値。文化行政だからといって、そこを切り離す意味はあまりないのではないかと思う。このような複合的な価値を顕在化させるアクションを起こしてもいいのでは。
・急勾配の坂を登って散歩する人もいる。何となく登っていた先にちょっと休める建物があるということは心理的な安全性の確保にすごく役立っているため、そこがなくなってしまうと、訪れる人の足は遠のくと思う。
・近隣住民は散歩や森林浴で利用しており、冬は施設廃止で除雪が止まれば本当に訪れる人が少なくなることが懸念される。

■AIR事業について

・滞在スタジオが13室あるのは日本で一番規模が大きいレジデンス拠点。滞在アーティストの延べ人数も多く、そのアーティストに紐づいて（こちらの事業費を使わず）、館内の交流イベントが発生している。多くのアーティストが同時に滞在することで醸されるものがある。それは国内のほかのレジデンスではなかなかできないこと。また、箱があるからこそ、国内外との交換プログラムが成立し、ネットワークができたということは、数字では測れない成果だと思う。アーティスト・イン・レジデンスを札幌市にきちんと根づかせていくためには、使い方を変えても箱を残すほうがかえって得ではないかと思っている。それは、財政状況が厳しい中で、施設から脱出したソフト事業だけでアーティスト・イン・レジデンスをやるというアイデアでは続かないと思っているから。まちの人たちにも喜ばれているというアートだけではない箱としての意味や用途として愛されていないと、逆に文化事業はもたない気がしている。また、アーティスト・イン・レジデンスというのは、文化芸術分野のインフラに当たると言われている。特定分野のインフラに関する方向性の議論は分野全体に影響をするため、文化政策レベルで行われるべきである(現状は、文化政策レベルにない、文化政策を論じるための座組が必要)。今の札幌市民が享受している文化芸術というのは、札幌生まれ・札幌育ちのものだけではなく、世界中のあらゆる文化であるはず。その文化の作り手は、その出自にかかわらず支援をするというのが理想的な考え方だから、税金を支払う市民に対する説明としても心配することはないと思う。

・事業成果の検証や評価手法が確立されていない状況で議論が進んでいる点に懸念がある。

・AIR事業は、海外から作家を呼んできて札幌に滞在させるというソフトだけで成り立つものでもないと思っている。天神山という小さな山があり、地域の人が日常的に散歩をしたり、お祭りに来たり、もともとのまちとしての成り立ちがあるところでレジデンスが実現したからこその実績がある。だから、やっていることを取り出して別のところにインストールするだけで上手くいくとは思わないし、振出しに戻ってしまうのではないかと感じる。そうすると余計にコストがかかったり、うまくいかなくて、やっぱりAIR事業はやめようとなるのは避けてほしい。

・海外アーティストと市民の交流や、緑の中での活動の意義は理解している。地域住民の休憩スペースについては、別で検討が必要。

⑸　閉会

事務局より次回（第２回）検討会を7月頃に開催する予定である旨が案内され、委員長により閉会が宣言された。